

ふるさとの川。個人史を溯る。

那須連峰 阿武隈川本谷

霧来沢流域を狙っていた週末だったが、崩れかけた雪渓で埋まっているとの情報があり断念した。天気も芳しくなく、転んだ先は阿武隈川本谷。

登れる滝がほとんどない、ゴルジュというほどのものがない、泊をつけるには短い中途半端な長さ、下部は滝見物で人気が多い、などなど、足の向きにくい沢のイメージがある。

しかし、全国で6番目に長い川の源流である。百名谷である。いや、そんなことより、福島に生まれ育った私にとっては、子どもの頃の「川」と言えば阿武隈川なのである。清流とはとても言えない中下流域ながら、育ったアパートの目と鼻の先にあり、メダカ釣り、川原での虫取り、ヘビとの遭遇、基地遊び、火遊び、コオロギの蒸し焼き、土手でのそり遊び、などなど、ある種の、大人になってもやることが大して変わらないという意味で現在につながる、貴重な原体験のひとつの舞台だ。その源流を、しかも本流を詰めない訳にはいかない。いつかは登らなければならない沢なのだった。

6月24日(土) : 晴れ

前夜はキョロロン村の駐車場でメンバー合流して仮眠をとった。トンネルですっかり改良された国道を大黒屋へ。歩き出しは、甲子大橋の右岸基部から車幅の道跡を辿る。南沢の出合、一里滝沢の出合、いくつかの堰堤を巻いて入渓した。

夏のような晴天で、沢は穏やか。福島県中通りと宮城県南部を縦貫する大河川も、源流部に来ればこじんまりとした流れだ。雪国の沢の迫力ある雰囲気も薄く、土と緑が濃い印象。

左、右と枝沢が入ると兩岸が狭まる。滝を見物しに行く人のためなのだろう、所々に鎖がつけられている。狭隘部では、少年時代の思い出の大河を、いとも簡単にひと跨ぎできた。

すぐに青味の深い釜を持った雌滝に出る。ハングして一見して登れない。右岸の巻き道(ここにも鎖やロープあり)に進む。巻いている途中から、先にはもっと落差の大きな雄滝が顔をのぞかせる。これも遠目に登れない滝。巻き道の分岐を下に行かず、まとめて巻く。急登。小さな尾根を越え、枝沢から本流に戻った。

続いて赤滝沢との出合。左の赤滝沢にはすぐに赤滝がかかる。周囲の土の暗色とのコントラストから、赤というより、白っぽく見える。2段の屈曲した滝は迫力がある。ここまで滝見物の人が入るようだ。

本流に戻るとこちらにもすぐに15mの滝。瀑布を左手に、正面から登れそうだが、泥混じりと逆層気味でいやらしい。躊躇なく氏家君が取り付いたものの、上に行くほど崩れやすい泥壁の傾斜が増

【日程】

2017年6月24日(土)
~6月25日(日)

【メンバー】

栗原(シ)、森山、
氏家、本多

【グレード】

3級

【地形図】

甲子山、那須岳

【記】 森山



すラインに乗ってしまい、中腹で進退窮まる。栗原さんが、右の傾斜の緩い泥レンゼを登り、ロープを出して上のバンドをトラバースした。氏家君には上から垂らしたロープを使って登ってもらった。念のためもう1ピッチロープを引いて登る。1時間近くかかってしまった。

さらに先の12m滝は、細い幅で端正に流れ落ちる。ここが核心。ここも直登はできそうになく、釜の手前から左岸の巻き。ロープを出して栗原さんがリードする。脆い泥壁をカギ状に方向を変えながら慎重に登る。まだ木化していない緑の新芽（木か草かと問われれば草）にしかランニングを取れないところをだましだまし登る神経戦だった。次の1ピッチも良くない泥壁だが、スパイクがあればさほどでもない。ここでもまた1時間近くかかった。この後沢は落ち着き、時間は早い。須立山からの右俣との出合近く、左岸の段丘に適当な場所を見つけ幕とした。

6月25日（日）：曇り

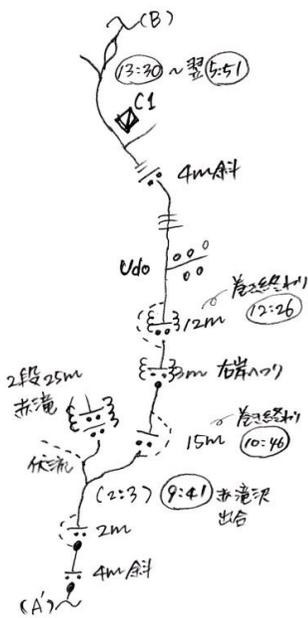
この日天気は下り坂の予報だったので、遅くならないうちに出発。すでに雪渓の消えた源頭部を詰める。念願だった阿武隈川最初の滴もしっかり水筒に納めることができた。最後は濃い目の30分の藪漕ぎ、三本槍岳とその東のスタレ山との鞍部で登山道に出た。車を停めた大黒屋まで登山道を戻り4時間。

【行程】

- 6/24 甲子温泉大黒屋駐車場 (7:09) ~ 入溪 (7:29) ~ 雌滝 (8:25) ~ 赤滝沢出合 (9:41) ~ C1 (13:30)
- 6/25 C1 (5:51) ~ 林道 (8:15) ~ 須立山 (9:30) ~ 大黒屋 (12:22)

2017. 6. 24 - 25
那須連山 阿武隈川本谷

作図：栗原山



€''

